ソロモン諸島におけるラピタ式土器の展開
—東京大学所蔵資料の紹介に代えて—

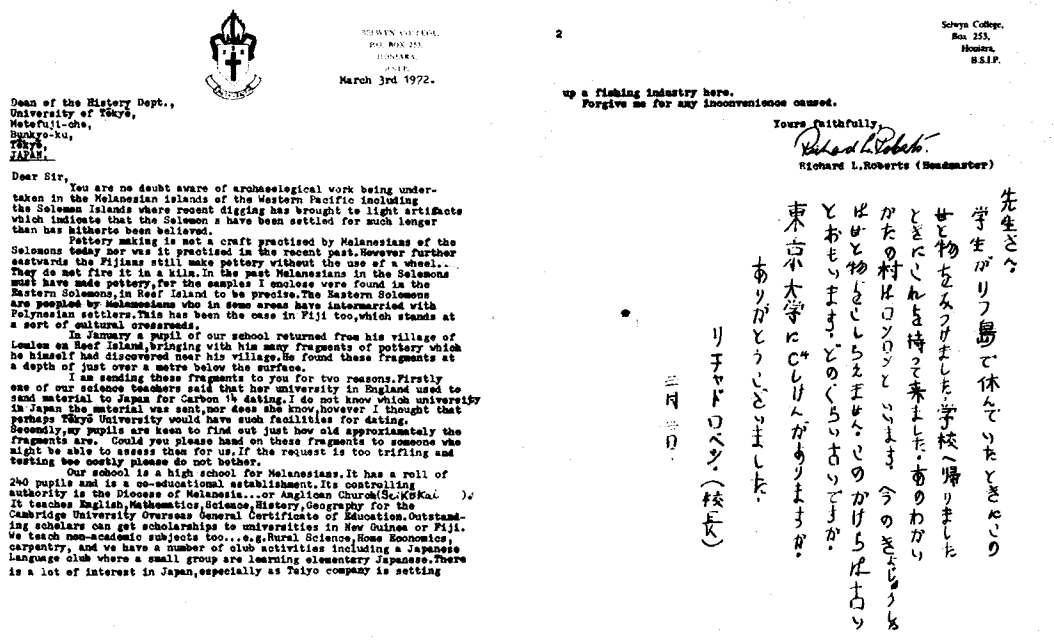
根岸　洋

要旨　紀元前1300年-700年の間に、メラネシア東部からポリネシアにかけて分布したラピタ式土器は、起源、分布範囲、年代測定値などについて既に詳細な研究が行われている。しかし型式学による編年研究がふるわないため、次段階の土器文化がどのようなものか明確な形で捉えられていない点が問題視される。この点を踏まえ、ラピタ式土器後半期とその直後の段階についての調査事例が蓄積されつつある、ソロモン諸島出土の土器群について紹介するのが本稿の目的である。まずラピタ式中期に比定される東京大学所蔵資料2点を紹介した後、ラピタ式中期、同後期、ポストラピタ段階の土器群の様相を記述する。次に、ソロモン諸島と同じメラネシアに属するニューギニア地域において、ポストラピタ段階が殆ど把握されていない点を指摘する。最後に、青銅器文化が部分的に流入する時期でもある、ニューギニア地域におけるポストラピタ期という段階設定の持つ意義について論じる。

はじめに

ラピタ式土器はオセアニア地域の新石器時代の後半期、具体的にはおおよそ紀元前1300年-700年の期間に、メラネシアからポリネシアにかけて広く分布した土器文化の名称である。その複雑な文様を初めとする型式学的特徴はもちろん、起源、分布範囲、年代測定値などについて既に詳細な研究が行われており、40年以上に渡る研究史がある。しかしIshimura（2002）が指摘するように、諸要素の組み合わせや消長を基にした型式学による編年研究が進展していない点が問題である。特に、ラピタ式土器がどのようにして次段階の土器文化へと変化するのかが明確な形で捉えられていない点が挙げられる。特に最初期のラピタ式が集中して分布するニューギニア地域でのその後の展開が、全くと言っていいほど研究されていない。日本に紹介される際にもこの点が省略されてしまう事が多いために、年代幅など基礎的情報について誤解を与えていることが多いように見受けられる。

本稿ではこの問題点の解決に留意した上で、ラピタ式土器後半期とその後の段階についての調査事例が蓄積されつつある、ソロモン諸島出土の土器群について紹介することにする。メラネシアの東端に位置するソロモン諸島はラピタ式土器の主要な分布地域の一つ（図1）であり、1970年代以降複数の研究者によって発掘調査が進められてきた（図3）。特に南東に位置するサンタクルーズ諸島では、いち早く1970年代に発掘調査が行われ、文様・器形ともに一定のまとまりを持つアセンブリッジが提示され注目を集めてきた。本稿にて資料紹介する東京大学文学部考古学研究室所蔵資料（1章）も当地域から採集されたもので、これらと同一段階に帰属すると考えられる。更に、近年報告例が増加したラピタ式後半期の資料を加えて、ラピタ式



SELWIN COLLEGE,
P.O. BOX 253,
HONIARA,
S.I.P.

March 3rd 1972.

Dean of the History Dept.,
University of Tokyo,
Motofuji-cho,
Bunkyo-ku,
Tokyo,
JAPAN.

Dear Sir,

You are no doubt aware of archaeological work being undertaken in the Melanesian islands of the Western Pacific including the Solomon Islands where recent digging has brought to light artifacts which indicate that the Solomon s have been settled for much longer than has hitherto been believed.

Pottery making is not a craft practised by Melanesians of the Solomons today nor was it practised in the recent past. However further eastwards the Fijians still make pottery without the use of a wheel... They do not fire it in a kiln. In the past Melanesians in the Solomons must have made pottery, for the samples I enclose were found in the Eastern Solomons, in Reef Island to be precise. The Eastern Solomons are peopled by Melanesians who in some areas have intermarried with Polynesian settlers. This has been the case in Fiji too, which stands at a sort of cultural crossroads.

In January a pupil of our school returned from his village of Lomlom on Reef Island, bringing with him many fragments of pottery which he himself had discovered near his village. He found these fragments at a depth of just over a metre below the surface.

I am sending these fragments to you for two reasons. Firstly one of our science teachers said that her university in England used to send material to Japan for Carbon 14 dating. I do not know which university in Japan the material was sent, nor does she know, however I thought that perhaps Tokyo University would have such facilities for dating. Secondly, my pupils are keen to find out just how old approximately the fragments are. Could you please hand on these fragments to someone who might be able to assess them for us. If the request is too trifling and testing too costly please do not bother.

Our school is a high school for Melanesians. It has a roll of 240 pupils and is a co-educational establishment. Its controlling authority is the Diocese of Melanesia...or Anglican Church(Sei Ko Kai). It teaches English, Mathematics, Science, History, Geography for the Cambridge University Overseas General Certificate of Education. Outstanding scholars can get scholarships to universities in New Guinea or Fiji. We teach non-academic subjects too...e.g. Rural Science, Home Economics, carpentry, and we have a number of club activities including a Japanese Language club where a small group are learning elementary Japanese. There is a lot of interest in Japan, especially as Taiyo company is setting

2

up a fishing industry here.
Forgive me for any inconvenience caused.

Yours faithfully,
Richard L. Roberts
Richard L. Roberts (Headmaster)

Selwin College,
Box 253,
Honiara,
B.S.I.P.

先生さま
学生がリフ島で休んでいたときにこれ
せと物をみつけました。学校へ帰りました
ときにしんせつを持って来ました。あのわかい
かたの村はロンロンといいます。今のきょうよう
はせと物をしらべません。このかけらは古い
とおもいます。どのくらい古いですか。
東京大学にしけんがありますか。
ありがとうございました。
リチャードロベッ（校長K）
三月三日

写真　採集資料と同封されていた手紙

中期、同後期、ポストラピタ段階の土器群の概略を記述する（2章）。最後に同じメラネシアに属するニューギニア地域の研究状況に簡単に触れ、ポストラピタ期という段階設定の持つ意義について論じる（3章）。

1．東京大学所蔵ラピタ式土器の紹介

ここで紹介するラピタ式土器片2点（図4）は、1972年3月に東京大学宛に送付されてきたものである。土器はプラスチック製の小箱に手紙2通と共に同封されていた（写真）。送り主はソロモン諸島の首都ホニアラにある、Selwin Collegeという高校の校長であった、Richard L. Robertzという人物である。手紙によれば1972年1月、同校の生徒の一人が彼自身の故郷であるリーフ（Reef）諸島ロムロム（Lomlom）島に里帰りした際、多くのラピタ式土器破片を持ち帰ったという。この2点を含む土器破片は集落の近くから採集したもので、現地表面から1m程の深さから見つけたものとある。この土器が何年前のものか、当時話題になっていた放射性炭素年代測定法を用いて調べてほしいという事で、東京大学に依頼してきたものらしい。残念ながら土器には炭化物が付着していなかったため年代測定ができず、その後考古学研究室に長らく所蔵されてきたという経緯がある。

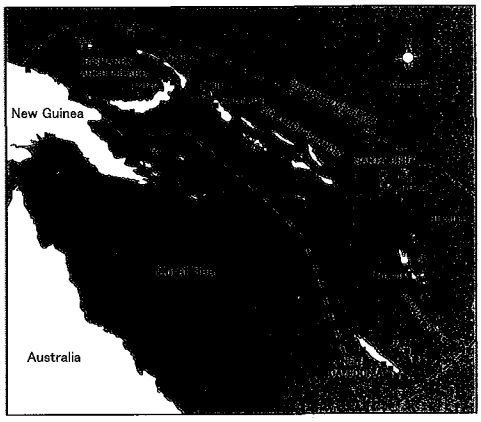


図１　メラネシアにおける主要なラピタ遺跡の分布(Kirch1997より作成)

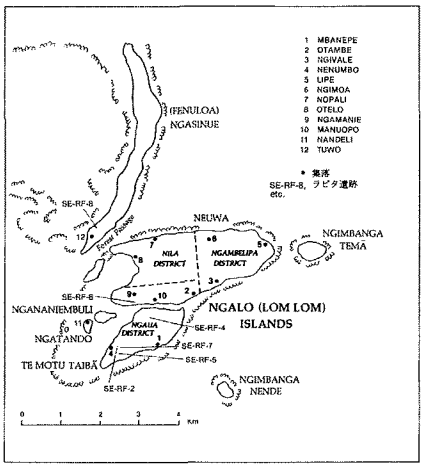


図２　ソロモン諸島リーフ諸島(Green1979より作成)

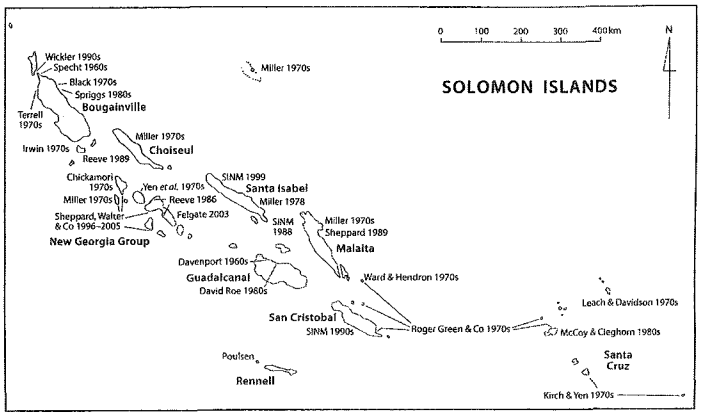


図３　ソロモン諸島における考古学的調査の歴史(Shepard et al.2006)

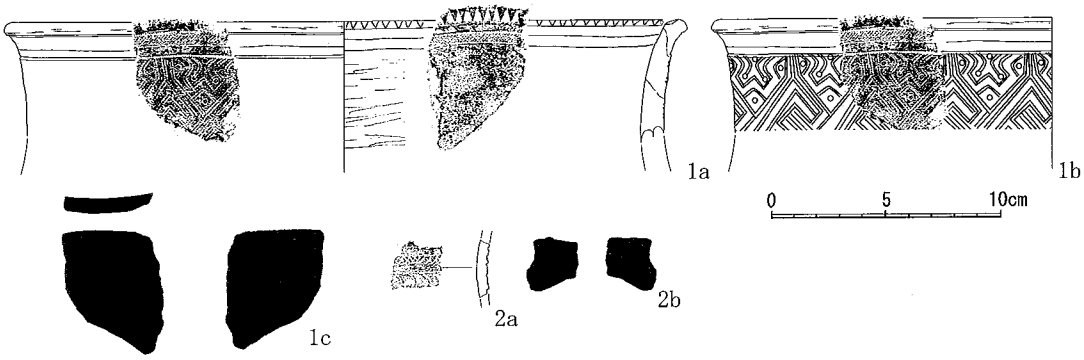
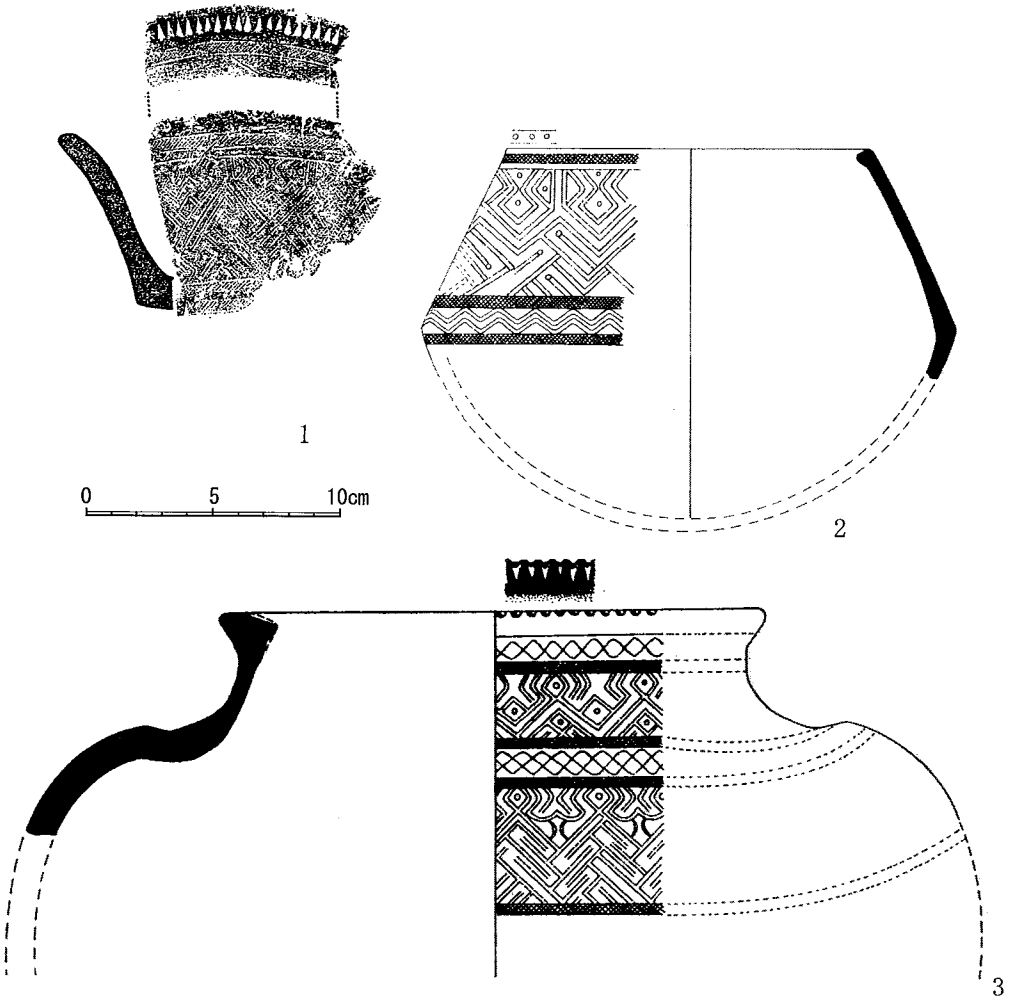


図４　東京大学所蔵ラピタ式土器実測図

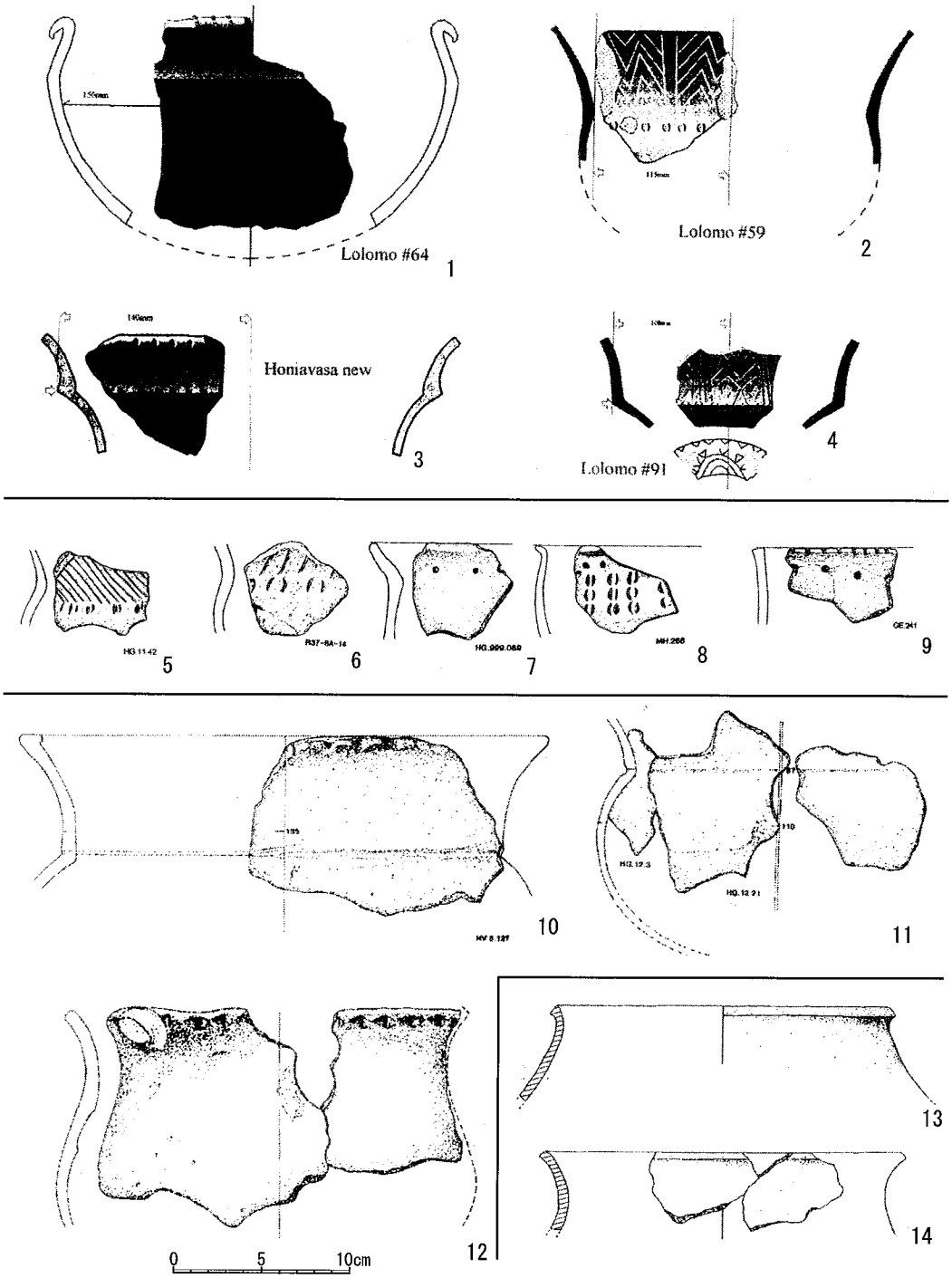


1 (近森1988) 2・3 (Green 1976)

図5　リーフ諸島ロムロム島出土　ラピタ式土器

現在、ロムロム島（図2）を含むサンタクルーズ（もしくはリーフ）諸島には計14箇所のラピタ遺跡が知られている（Sheppard et al.2006:53）。その内の大部分はRoger Greenによって報告された遺跡である（1976）。発掘調査された主要な遺跡としてSZ-8、RF-2、RF-6の3遺跡が挙げられる。残念ながら現在のところ採集者が特定できないため、これらの遺跡のうちどこから採集されたものか確定することができないが、Greenの記述（1974:53）によれば、最初にラピタ式土器が発見されたのは1970年、RF-2遺跡の近くにあるNenumbo村であったという。その後こうした遺跡で継続的に発掘調査が進められたことを考えると、1972年に採集された本資料は、Greenが調査した遺跡とは別の地点または遺跡から見つかったものではないかと推論することができる。

採集資料は口縁部片（図4：1）と胴部片（同2）の2点である。共に橙味を帯びた赤褐色を呈す



1・2・4・10～12 Lolomo 3 Honiavasa 5～9 Roviana Lagoon(Felgate2008) 13・14 Tikopia(Kirch and Yen 1982)
(5・6 Miho式 7・8 Gharanga式 9 Kopo式 13・14 Kiki式)

図6 ソロモン諸島におけるラピタ後期～ポストラピタ期の土器群

るもので、赤色スリップ技法を用いたラピタ式土器と判断できる。このうち前者の口縁部片（同 1）は、先端がやや外反する器形であり、内外面とも入念な磨きがなされており、口縁最上段の段を作出している。少なくとも口縁部付近は粘土紐巻上げによって作られたと考えられ、外傾接合痕を観察することができる（同 1a)。主文様はいわゆるスペード文と直線を主体とした迷路型文様の組み合わせである（同 1b)。これは Mead の文様分類による M13 もしくは 14 の範疇に入り（Mead et al. 1975)、Ishimura（2002:83）の設定した S-Type 7 に相当する。内面上端の鋸歯文はサイズが一定になるよう丁寧に作り出されている。典型的な西ラピタ（Western Lapita）様式ということが出来る。

この口縁部片に施された文様の類似資料はいくつかあり、皿（図 5：1）・浅鉢（同 2）・壷（同 3）など複数器種に渡ってその存在を確認できる。このうち文様施文パターンがそっくりなのが 1 であり、スペード文、迷路型文様の種類や文様単位のサイズまで共通している。この 2 つの文様要素にはバリエーションがあり、器種や施文部位によっても違いがあることが見て取れる（同 3)。Ishimura（同上：87）はスペード文の系統観を提案しているが、同じ系統上にある複数の文様が同じ遺跡あるいは地域で確認されているのは RF-2・RF-6 遺跡だけである。この点から少なくとも、サンタクルーズ諸島において同種の文様が系統的に変遷していたことは指摘できるであろう。この他、RF-2 遺跡からは人面文（Face Design）の複数のバリエーションが見つかっており、これらの組み合わせが一つのアセンブリッジをなしている。

ここで報告した採集資料（図 4）は数が少ないものの、その文様の特徴から特に RF-2 遺跡と同一年代に帰属することが考えられる。放射性炭素年代測定結果（Green 1991）によれば、SZ-8 遺跡が 1200-1100 BC、RF-2 遺跡が 1200-900 BC、RF-6 遺跡が 800-500 BC と測定されている。本資料が採集された遺跡が、少なくとも紀元前 1000 年前後に位置づけられると言うことが出来よう。

2．ラピタ式中期・後期と、ポスト・ラピタ期の土器群

従来、ラピタ式土器はその分布範囲の違いから、Far Western（ビスマーク諸島）・Western（ソロモン諸島～ニューカレドニア）・Eastern（フィジー～サモア）の 3 種類に分けられるとされてきた。しかし近年 Summerhayse（2000・2001）は、主にビスマーク諸島における発掘調査成果に基づき、前期・中期・後期の 3 段階編年案を提案している。例えばビスマーク諸島の FSZ・FOJ といった遺跡で 800-400 BC という測定年代が出ており、これが他地域と併行しラピタ式後期という画期を作り出しているからである（同 2001:129)。地域によって異なる編年体系を採用するのでなく、メラネシア・ポリネシアに共通した時間軸を提案するという意味で意義深いと評価できる。これに従うと、前章で紹介したサンタクルーズ諸島の遺跡群のうち、採集遺物に類似した土器を含む RF-2 遺跡はラピタ式中期に帰属することになる。最初期にあたる前期土器がビスマーク諸島にしか分布しないことを考えると、全体としてラピタ式土器の編年案は西から東へと向かう階段編年をなしていると言えそうである。方法論と結論に若干の差異があるものの Ishimura（前掲）も同様の結論に達

し、Phase 1～3の3段階編年を提案している。

幾何学文様のバリエーションが豊かなラピタ式中期に比べ、同後期は文様の単純化、あるいは無文化という変化の方向性をたどることが知られている。現在までに報告されたソロモン諸島（図3）における中期～後期の土器群を材料に、ラピタ式中期から後期にいたる型式学的な変化について考察してみたい（図6）。北部に位置するニュージョージア諸島Lolomoでは、スタンプ文・沈線文、あるいは単純な刻み技法からなる土器群がある（図6：1～4）。報告者であるFelgate（2008）によって1000-800 BCの範囲内におさまると報告されたこの土器群（Honiavasa Carinated jars）は複数の器種から構成されるが、いずれも胴部に屈曲を持つ点が特徴的である。これは年代から言えばラピタ式中期の段階に入るが、図4・5で示したような幾何学文様とは完全に系譜が異なることが見て取れる。これはソロモン諸島北部・南部が中央部を境に歴史的変遷を異にしてきたという見解（Sheppard and Walter 2006: 53-54）を裏付けるものである。つまりラピタ式中期においては、ビスマーク諸島から地理的には遠いソロモン諸島南部が、より近い北部よりもビスマーク諸島のラピタ式に類似しているという事を示している。ソロモン諸島北部は北に隣接するブーゲンビル島により近い様相を持っていると言える（Wickler 2001）。

ラピタ式後期と考えられる土器群としては、やはりニュージョージア諸島に分布する幾つかの土器型式（図6：5～9）が挙げられる。文様構成はより単純化し沈線文・押型文などが見られる。短く外反する頸部を持つ事が特徴的である。年代測定では900-600 BCという数値が与えられている（Felgate前掲）。

ラピタ式後期直後、つまりポストラピタ期の土器群として無文土器群（Plain Ware）とされている一群（図6：10～12）を挙げておく。頸部が伸び外反がいっそう強まったもの（同10・11）、外反が弱まり直立気味になったもの（同12）などがあるが、いずれも器面が粗く刻み以外基本的に無文である点が特徴的である。サンタクルーズ諸島の南端に位置するTikopia島（Kirch and Yen 1982）でも、長い頸部を持つKiki式土器（同13・14）が知られている。口縁部先端に作出された面がある点がソロモン諸島北部とは異なる。また器種が単純化することも注意しておきたい。年代測定では900-100 BCの広い時間幅が与えられているが、型式学的特徴を重視してポストラピタ期の土器群と理解しておきたい。

以上まとめると、ソロモン諸島におけるラピタ式中期からポストラピタ期に至る型式学的変化は、①文様の単純化・無文化、②頸部の伸びとそれに伴う器種の単純化という2点に集約できると考えられる。こうした現象は、沈線文・貼付文伝統が生まれるヴァヌアツやニューカレドニア地域と必ずしも一致するものでなく、メラネシア東部の地域的現象として位置づけられるものである。

3．ニューギニア地域との比較と展望

以上、ソロモン諸島におけるラピタ式中期からポストラピタ期にかけての変化の様相について概

略を著述してきた。本稿で紹介したサンタクルーズ諸島ロムロム島採集資料はラピタ式中期に相当するが、それと別系統の土器群がソロモン諸島北部には存在し、両者ともポストラピタ期の無文土器群へと変化を遂げていく事を明らかにした。まだ放射性炭素に依拠せざるを得ない状況ではあるが、新出資料を用いて型式学的変化の方向性を抽出し得たことについては、得るものが大きかったと考えている。

最後に同じメラネシアに含まれるニューギニア地域の状況について、比較するという観点から簡単に触れておきたい。ニューギニア島南岸部には紀元前後に年代測定されている、赤色スリップ（無文）土器とラピタ式に類似する印刻文（Dentate-Stamp）土器が共伴するアセンブリッジが知られている（Bulmer 1999）。これまでに複数調査された事例から、測定年代では紀元前後より古くなる例がないと考えられている。しかしそれではラピタ式（前期～中期）に類似する理由が説明できないし、そもそもビスマーク諸島から地理的に離れたニューギニア島南岸になぜこれらが分布するのかは、未解決のままである。それにも関わらず器形の表面的な類似を論じたり（Bulmer 前掲）、胎土分析や黒曜石の分析から交易ネットワークの復元を試みる（Summerhayse and Allen 2008）のは時期尚早であると言わざるを得ない。むしろ重要であるのは、ビスマーク諸島から地理的に近い地域において、ポストラピタ期の土器群を位置づける[1]ことであると筆者は考えている。その際にブーゲンビル島や本稿で紹介したソロモン諸島の事例が、比較資料として重要になってくるのは間違いないであろう。型式学的な変化の連続性を追認してこそ、ラピタ式土器が終わりを迎える様相を把握できると考えるからである。ちなみにポストラピタ期（700 BC-BC/AD 前後に位置づけられる時期）には、ニューギニア島北部に青銅器文化の流入が見られる（例えば Ambrose 1988）。この時期を考古学的に設定することが、東南アジア史との関連を考える上でも重要な役割を持ち得ることが了解されるであろう。

謝辞

東京大学所蔵ラピタ式土器（図 4）の発表をご許可頂きました、今村啓爾先生に御礼申し上げます。

〈注〉

1）ポストラピタ期の土器文化が持つ多様化については、Spriggs(2003) が詳述している。

〈引用文献〉

近森　正　1988『サンゴ礁の民族考古学』雄山閣出版

Ambrose, W.R. 1988 An Early Bronze Artifact from Papua New Guinea. *Antiquity* 62: 483-491.

Bedford, S., Sand. C and Connaughton, P.(eds.) 2008 *Oceanic Exploitations: Lapita and Western Pacific Settlement,* Terra Australis 26, Australian National University.

Bulmer, S. 1999 Revisiting Red Slip: The Laloki Style Pottery of Southern Papua and its Possible Relationship to

Lapita. in J. Galipaud and I.Lilley (eds.) *The Pacific 5000 to 2000 BP: Colonisation and Transformations.* Paris.

Felgate, M. 2008 Leap-frogging or Limping? Recent Evidence from the Lapita Littoral Fringe, New Georgia, Solomon Islands. In S. Bedford et al.(eds.): 123-140.

Green, R.C.

1974 South East Solomon Islands Culture History Programme — A Preliminary Report. *The Journal of the Solomon Islands Museum Associations* 3: 53-60.

1976 Lapita Sites in the Santa Cruz Group. In R.C. Green and M.M. Cresswelll (eds.) *Southeast Solomon Islands Cultural History : A Preliminary Survey*: 245-265. Royal Society of New Zealand.

1979 Chapter 2 Lapita. In J.D. Jennings.(ed.) *The Prehistory of Polynesia*: 27-60. Harvard University Press.

1991 A Reappraisal of the Dating for Some Lapita Sites in the Reef/ Santa Cruz Group of the Southeast Solomons. *Journal of Polynesian Society* 100(2): 197-207.

Ishimura, T. 2002 In the Wake of Lapita: Transformation of Lapita Designs and Gradual Dispersal of the Lapita Peoples. *People and Culture in Oceania* 18: 77-97.

Kirch, P.V. and D.E. Yen 1982 *Tikopia: The Prehistory and Ecology of a Polynesian Outlier.* Bernice P. Bishop Museum Bulletin 238. Bishop Museum Press.

Mead, S.M., L.Birks., H. Birks. and E.Shaw 1975 *The Lapita Pottery Style of Fiji and its Associations.* Polynesian Society Memoir 38. Wellington; Polynesian Society.

Shepard, P.J. and Walter, R. 2006 A Revised Model of Solomon Islands Culture History. *Journal of Polynesian Society* 115(1): 47-76.

Spriggs, M. 2003 Post-Lapita Evolutions in lsland Melanesia. in C.Sand(ed.) *Pacific Archaeology : Assessments and Prospects.* Nouméa : Départment Archélogie, Serbice des Musées et du Patrimoine de Nouvelle-Calédonie.

Summerhayes, G.

2000 *Lapita Interaction.* Terra Australis 15, Australian National University.

2001 Far Western, Western, and Eastern Lapita : A Re-Evaluation. *Asian Perspectives* 39: 109-138.

Summerhayes, G and J.Allen 2008 Lapita Writ Small? : Revisiting the Austronesian Colonisation of the Papuan South Coast. In S. Bedford et al.(eds.): 97-122.

Wickler, S. 2001 *The Prehistory of Buka: A Stepping Stone Island in the Northern Solomons.* Terra Australis 16, Australian National University.

根 岸　　洋

Lapita Pottery Development in Solomon Islands

Yo NEGISHI

Lapita pottery (3300-2700 BP) is widely distributed from eastern Melanesia to Polynesia. These almost forty years, many archaeologists have studied minutely about its homeland, geographical distribution, and absolute dating. Nonetheless, as there have been little typological studies on it, it is still unclear whether Post-Lapita ceramic groups derived from Lapita culture or from another one. This unsolved question is so called 'Post-Lapita problem'. To solve this problem from the regional perspective, this paper is aimed to review Lapita and Post-Lapita ceramic cultures of Solomon Islands. First, combining with a brief report of two ceramic fragments possibly found in Lomlom island (Reef Islands), which are kept in University of Tokyo, the typological continuities between Lapita (middle and late) and Post-Lapita pottery are described alternatively. Second, I point out 'Post-Lapita problem' entailed in the coast and islands New Guinea. Lastly, to compare with Solomon Islands, I discuss the regional importance of defining Post-Lapita period when bronze materials were exported from Southeast Asia to this region.